

## 「東方の三博士の礼拝」 (マタイ二章一〜二節)

### 1 マゴス (占星術の学者たち)

クリスマスが終わってまたクリスマスの聖書？ そうお思いの方もおられるかと思いますが。たしかに今日の箇所は、クリスマスで一番よく読まれる箇所、クリスマスの話として皆が知っている箇所です。

しかし今日は少し別の観点からこれを取り上げています。イエスの誕生はメシアの誕生、救い主の誕生ですけれども、イエスはイスラエルのためだけのメシアだけではない、万人の救い主であるということ、そうした広がりをもっていることを、占星術の学者たち、三人の博士の旅を通してあらためて私どもは聞きたいのです。

今日一月六日は教会の暦では顕現日 (公現日) と呼ばれます。イエス・キリストが世界の光、万民の救い主として現れた、そのことをおぼえる日です。じつは昨日でクリスマスは終わり、飾りもみな昨日皆さん方が外して下さいました。今日をもって教会の新たなスタートとなる日です。

イエス・キリストはイスラエルのメシアであるだけではない、万民の救い主だといま申しました。正確には、イスラエルのメシアであるがゆえに、万民の救い主だと言わなければならぬのだと思いますが、それはともかく、今日の箇所に登場する博士たち、占星術の学者たちというのは、その万民、イスラエルの民ではない異邦人・外国人を代表している人たちです。その彼らがイエスにまみえ、礼拝し、ふたたび自分たちの国に帰り、イエスとの出会いを心に刻んで歩み始めます。教会の古い言い回しに「イエスの誕生はわれらの誕生」という言葉があります。三人の博士の話はこのわれらの誕生の物語です。ここに伝えられている、われらの一人でもある彼らに注意してみましよう。

そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」。これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった (一〜二節)。

「占星術の学者たち」とあります。口語訳では「博士たち」 (最新の聖書協会共同訳でも「博士たち」)、もとの言葉ではマゴスといっています。マジック、マジシャンのもとになった言葉です。

ですからここは「見よ、マゴスがエルサレムにやって来た」とはじまります。びっくりしています。ヘロデ王だけではない、エルサレムの人びとがみなこの事態にびっくりしたというより、不安を感じた、と書いてあります。

見知らぬ外国人が現れたからです。キリストの救いはすべての人の救い主だと今は私どもは知っていますけれども、当時のイスラエルの民はそうではなかった。イエスの弟子たちも最初からそう考えていたわけではなかった。イエスも徐々にそれを自分

の言葉であるいは行動ではつきりさせていったのです。異邦人であるティルス・シドンの女の信仰がイエスによって賞賛され、娘がいやされることが福音書には出てきます（マタイ一五章）。有名なたとえで隣人愛の模範として示されている一人のサマリヤ人、彼はユダヤ人たちと敵対していた外国人でした。旧約聖書も、今日は詳しく触れませんが、信仰の二本として注目すべき外国人が多く出てきます。そうしたことは当時のイスラエルの人々には思いもよらないことでした。ですから突然外国人がそれと分かる格好でやって来てメシアのことで王宮を訪ねるということは、不安をかき立てる事件以外のものではありませんでした。イスラエルの人々がメシアの到来を待ち望んでいたとしても、それは我が民の窮状をとりわけローマから救済するメシアであって、異邦人にも及ぶ、万人の救いというようなところはまだ考えは及んでいなかったからです。

## 2 選ばれた異教徒

しかし神の救いの計画、摂理からすれば、いまこの異邦のマゴス、占星術の学者たち、博士たちもまたメシア・イエスに出会い、この方を主として、神を信じ歩むことへ向けて旅を始めることはあつてよいことであつたのです。彼らが外国の異教徒であることも、占星術をなりわいとする 것도、その妨げにはまったくならない。それがここで何より大切なことです。

彼ら異教徒たちが、こうして神の救いの歴史の中に入っていきます。それは神の恵みといたつたらよいのでしょうか、選びといたつたらよいのでしょうか、彼らを神の救いの中に入り込ませた神の憐れみと導きを私は強く感じています。

そう感じるいくつかの理由を上げたいと思います。一つは彼らが「東の方」から来たといわれていることです。ユダヤから見て東の方とは、そのときイスラエル同様ローマ帝国の支配下でしたが、かつてのバビロニア、ペルシャのことです。ユダヤ人が六〇〇年前捕囚の憂き目にあい、苦難を味わつたところからです。しかしそれいらいじつはそこには彼らの影響が残り、それが生きていた（J・シユニーヴィント）。メシアが西の国に生まれる（民数記二四・一七）という待望が彼ら諸国民にもあつたのです。それが間接的には彼らを旅立たせることになつたのです。

もう一つは、彼らの職業のことです。「占星術」、平たくいうと星占い、むしろいまの言葉では天文学者と言われてもいいと思います。天体の動きを読み取り、地上の出来事の予言をするのが彼らの役目です。天体の動きを観察して読み解く、そのかぎり彼らは科学者です。しかしそれと地上の人間の営みのあれこれと結びつけていくとなると、やはりちよつと私ども現代人には眉唾になります。占星術の学者はまじないといわれるようなこととも関わっていたはずで、これに対してイスラエルでは自然も歴史も治めているのは神様だと考えられていたので、そうしたことに携わる者は昔からもつとも忌み嫌われていました。占星術は偶像礼拝と迷信の源として考えられていた。彼らはこうした聖書の世界からもつとも遠くにいた人たちです。しかしそうし

た異教の仕事がこの場合幸いしたといったらよいでしょうか。新しい星の出現を発見し、それが彼らを旅立たせることになったからです。そうしたいかがわしさも用いて神は彼らを世界の主イエスにまで導かれた。

そこで選ばれた異教徒に与えられた三つ目の恵みを上げてよいと思います。それが星の導きです。「わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです（二節）。この星に旅立ちを促されただけではいい。彼らはこの星に導かれてイエスというメシアのところまで来たのです。エルサレムの町の中心に突然現れます。「東方でその方の星を見たので」。ここまで来た理由はこれだけです。それ以上のことは彼らにも説明しようがないのです。

この箇所はクリスマスマスの度毎に読んでいつも心高められる思いがします。つまり神と無関係に生きていた。その彼らのところにも星が輝いた、星が現れたということ。星の導きそのものは迷信につながるものがあつたとしても、それも含め彼らが身近に知っていたものを用いて神ご自身が本当の救い主に出会う道を開いてくださったということ、それは聖書にくり返し語られている神の真実です。神の光の届かないところはなない。彼らを、彼らの世界からその外へと踏み出させたのは、その星の光、その星の輝きでした。その星に吸い寄せられるようにして彼らはやってきたのです。長年の天体研究の成果がどのように役立つたか、それは分からない。しかしそうして得た知識の延長線に、しかしそれをはるかに越えた導きが与えられた。信仰が昔から飛躍とか決断という言葉で表される場合があります。彼らの応答もそうしたものでした。星の出現に信仰をもつて応答し旅立ったとみてよいと思います。それが博士たちの旅立ちの真実です。

### 3 自分たちの国に帰って

ここに登場する占星術の学者たち、マゴス、博士たち、その数を三人と私は申し上げていますが、じつは三人とは書いてありません。宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬の三つを献じたところから三人になったようです。

キリスト教の絵画でも昔から三人です。しかも三人の王様の礼拝として描かれることが多かった。その場合、それぞれに名前もあります（メルキオール、バルタザール、カスパール）。それから三人を三大陸、ヨーロッパ、アフリカ、アジアを代表している人と考え、そうした姿で示されることがありました（黒人として描かれた）。もう一つの伝統は、三世代、老年、中年、そして若い世代、この三世代を表すとして解釈されたときもあります。

しかしどの解釈においても、キリスト・イエスは、すべての人の、すべての民の主であり、メシアであるということが考えられています。それがこの聖書箇所の要点です。イエスはイスラエルへの神の救いの約束の実現として人となった神です。それゆえこの方はすべての人の神です。この方は神ともいます方です。この方、イエスと共にあるならが私どもはみな神と共にあるのです。

こうして占星術の学者たち、マゴス、博士たちは、その遍歴の旅を通して、イエス

との出会いを通して、それまで自分たちに何の関わりもなかった神の歴史の中に入り込んで行ったのです。

イエスとの出会いによって神の歴史に入り込んでいくということは、逆に、神の救いの歴史が、神ご自身が、彼らの中に入り込んできたということではないでしょうか。彼らの中に、そうです、私どもすべての者の中に入ってくるということですから。それは彼らが、そして私どもが今や神とともに生きることができるようになるためです。イエス・キリストがお生まれになったということとは人はだれもはや神なしではないということですよ。

神なしではない、神なきところから救われるというのは、しかし私どもの悩みがいっぺんに解消したり、病気がすぐになおったり、すぐに幸福をつかむことができるというのとは少し異なります。「死の谷の陰を歩」かないで済むということではなくて、そこを歩む時でも、恐れない、意気阻喪しない、神が共におられるから、そのように告白することです（詩編23）。神なきところから救われるとは、私どもが自らの人生を神の地平の中に見いだし神との関わりにおいて新しく生きるということ、それが許されるということですよ。

こうしたことがマゴスに起こったのです。最後はどうなったのでしょうか。

「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った（一二節）。

彼らの帰り道には星が輝いていませんでした。彼らを照らし導いて行くのは何でしょうか。それは頭上に輝く星ではなく、夢で啓示された「お告げ」、すなわち、言葉です。彼らは別の道を行くことを命じられます。神は行くべき道を、別の道を言葉によつて、私どももの心の中に響くみ言葉によつて明らかにしてください。幼子イエスを拝して自分の国に帰った学者たちを待っているのはなるほど依然として異教の世界です。いまだ暗闇の世界です。でも、み言葉は彼らの心に響きます。彼らが帰り着いた自分の国でみ言葉とともに歩みつづけたことは確かなことです。

最後に、説教の準備をしていて、面白い説に一つ出会ったので、紹介して終わりたいと思います。昔の聖書の解説の本（ベンゲル）に出ていたのですが、占星術の学者らの献げた黄金、乳香、没薬、これがどうなったかということですよ。これらの宝物（金や薬）のおかげで、この後、ヨセフ、マリア、イエスの聖家族は、ヘロデの難を逃れてエジプトに下るわけですが、この貧しく若い夫婦、彼らの避難生活が支えられたのだ、そしてわれわれは父なる神の慈悲深い摂理を思うべきだということです。この解釈に出会って聖書が何かばあつと分かったような気がしました。霊においても肉においても私どもを支えてくださる神に信頼し、従い、新しい年も、互いに助け合いながら歩んでまいりましょう。

（二〇一九年一月六日）